

# コロナ禍が示唆する新しい生活と社会

— 既存の枠組みからいかにして脱出するか —

藺田 碩哉

法政大学大原社会問題研究所

## New Society and Lifestyles Suggested by COVID-19

— How to Escape from the Existing Framework —

Sonoda Sekiya

The Ohara Institute for Social Research, Hosei University

**Abstract** : The new-coronavirus raging around the world in 2020 has had a serious impact on the social and personal lives of all countries. Country-to-country relations have decreased, economies have shrunk, and people were trapped in their homes, lost their enjoyment of life, and could not even travel.

This forced us to reconsider many things that we had never had doubts about. Are our marital relationships and parent-child relationships all right as they are, and are the living environments in our neighborhoods fulfilling? Should school education be the same as it has been until now? How can we help those who have lost their jobs due to the corona-virus situation? What is needed to enrich welfare services for the elderly? Is it acceptable to fell forests, disperse exhaust fumes, and ignore the issue of global warming?

Many Japanese workers who were addicted to “overwork” have begun to seek a new lifestyle that balances work, home and leisure. They seek to enhance their home-based activities, showing greater interest in reading, art and music, enabling more enjoyment of their personal time, while cultivating new forms of communication utilizing online tools.

One cause of concern is that there is a worldwide movement to strengthen the power of central governments in response to COVID-19. Any necessary social control must be built on the basis of the voluntary cooperation of citizens. The goal of the post-corona world should not be to strengthen governments, but rather to strengthen the solidarity of citizens.

**Key Words** : Covid-19 pandemic, new lifestyles, work-life balance, leisure, social control

**要旨** : 2020に世界中で荒れ狂ったコロナウィルスは、すべての国の社会生活と個人生活に深刻な影響を与えた。国と国の関係が断たれ、経済は縮小し、人々は自宅に閉じ込められ、生活の楽しみを失い、旅に出ることもできなくなった。

それによって私たちは、これまで何の疑問も抱かなかった多くの事柄を見直す必要に迫られた。夫婦関係や親子関係はこれでよくなったのか、近隣の生活環境は充実しているか。学校教育は今のままでよいのか。コロナ禍で仕事を失った人々をどうやって救済するのか。高齢者への福祉サービスを豊かにするためには何が必要か。森林を伐採し、排気ガスをまき散らし、温暖化を放置しておいていいのか。

これまで「働き過ぎ」中毒だった多くの日本の勤労者は、仕事と家庭とレジャーのバランスを取った新しいライフスタイルを求め始めている。ホームワークを充実させ、個人の時間を楽しむための読書やアートや音楽への関心を高め、オンラインを活用した新しい人間的コミュニケーションを開拓しようとしている。

警戒しなければならないのは、コロナに対処するために中央政府の権力を強化しようという動きが世界中で広がっていることである。必要な社会統制は、市民の自主的な協力を土台に作りあげなくてはならない。政府を強くするのではなく、市民の連帯を強化することがコロナ後の世界が追及すべき目標である。

**キーワード** : コロナ禍、新しい生活様式、ワークライフバランス、余暇、社会統制

## はじめに

2020年初頭にはじまった新型コロナウイルスの蔓延は、瞬く間に世界を駆け巡り、先進国と途上国とを問わず、市井の人々の生活と各国の経済と政治に甚大な影響を与えつつある。物流の動きが阻害されたことで各国の経済活動は一気に冷え込み、成長率は軒並みマイナスという事態になった。特に国を越える旅行が厳しく制限されて観光産業は回復不能といえる程の大打撃を被り、旅館やホテルの廃業が続いている。

政治に眼を転じると各国の政府はコロナ対応に追われ、その成否が政権の存否にまで影響を与えている。憲政史上最長を誇ったわが安倍政権が退場に追い込まれたのはコロナ禍への対応のまずさが一因と思われるし、アメリカのトランプ大統領が激戦の末、バイデン候補に敗北したのも「コロナを甘く見た」ことと無縁ではあるまい。

コロナ禍は今日の世界がいかに緊密に結びあわされているかを如実に示してくれたと同時に、グローバルな規模で人と人とを分離させ、その関係を打ち壊すように作用し続けている。この事態を前にしてあらゆる国の人々は自分と世界について抱いていた認識を改めざるを得なくなった。これまで疑うこともなく信じていた信念を問い直し、先の見えない世界の再構築を計らざるを得ない。コロナ以前の世界はもう二度と戻ってはこない。何かが変わらなくてはならず、現に何もかも変わりつつあるという状況を前にして、私たちは何が出来るのか、何をすべきなのかを考え直してみたい。

### 1. コロナ問題の広がりを概観する

はじめにコロナ禍がいかに広範な問題提起を迫るものであるかをいくつかの面から確認しておこう。

#### 1) コロナと日常生活

コロナ禍は、生活インフラに関わる仕事、食料と日用品の生産・配送業や医療と福祉のサービスのよな「エセンシャルワーク」以外のもろもろの仕事を休業に追い込んだ。会社も官庁も学校も閉ざされ、社交空間からは閉め出され、公共施設の大半が利用不可能になって、多くの人々は突然降って湧いた「コロナの休日」の前に呆然として立ちすくんだ。

そこで否応なく突き付けられているのは家庭と近隣の見直しということである。

まず思い知らされたのは家族とともにある時間の意味と価値である。普段は朝早く出かけて深夜に帰宅する父親も、パート勤務で忙しい母親も、慌ただしく学校へ急ぐ子どもたちも行き場を失って一日中在宅して顔を突き合わせるようになった。家族関係が良好ならばそれはそれで幸せな時間の到来・回復ということだが、関係が悪ければまことに居心地が悪いことになる。日常的には覆い隠されていたDVや子どもの虐待が顕在化したら、コロナの休日は間違いなく地獄になってしまう。

家庭のメンバーが健康な状態を維持し、家庭内で楽しい時間をつくれるかどうかQOL（生活の質）の決め手となった。有り余る時間をテレビとゲームだけで持たせることは難しい。家族が円滑なコミュニケーションを保ち、だんらんのひとつときを持ち、協働してできる何らかの活動に取り組む—それは掃除でも料理でも日曜大工でもいいし、そろって絵を描いたり家族アンサンブルの音楽を奏でられたら素晴らしい。コロナ禍はそれぞれの家庭がどの程度の文化度を持っているのかを露わにした。

家庭を取り巻く近隣の状況も重要であることが示された。わが国の場合はこれまでのところ中国やヨーロッパのいくつかの国のように完全なロックダウンまでには至らなかったもので、近隣でも買い物や散策まで禁じられたわけではない。どこを見ても地域の小公園には子どもから高齢者までさまざまな人が訪れて思い思いの活動をしていた。公園やプレイロット（遊び場）や開放された広場や原っぱの存在価値を多くの人々が改めて認識することになった。さらには近くに野原や雑木林のような残された緑があれば格好の散策場所となった。大きな川の河川敷や都市周辺の里山にはふだんやってこないような多くの人々が訪れ、憩いのひとつときを楽しんでいた。公園や開放された空間がいかに重要な存在であるかが実感できたと言える。

公園と同様に公民館や図書館のような文化的な公共施設も家庭と近隣社会にとって重要な役割を持っているが、そのほとんどは「3密を避ける」という理由で閉鎖されてしまった。集会施設の閉鎖はやむを得ないにしても、図書館については一考の余地が

あったはずである。コロナの休日を充実させるために本の貸し出しは不可欠と言ってもいいほどの重要なサービスであるにも関わらず、多くの図書館が本の閲覧だけでなく、貸出までもストップさせてしまった。現在、どの図書館でもオンラインで蔵書の検索が出来るはずで、家庭で読みたい本を検索して図書館の窓口で受け取るだけなら、3密にはならないはずだからである。少数例だが、ネットで注文を受けた本の配送サービスを実行した図書館があったことを記しておきたい。コロナ禍は今後も必ずやってくるに違いない。その時、家庭や近隣にどんな施設やサービスを装備しておくべきか、すべての自治体は今回の経験を踏まえて計画を練り直す必要に迫られている。

## 2) コロナと日本社会の体質

日常生活圏から視点を変えて、目を日本社会全体に向けてみよう。世界の国々を襲ったコロナ禍は期せずしてそれぞれの国の特徴や問題点をあからさまにしてくれた。わが日本社会はどうであったか。

まず言われるべきは政府の無能である。各国の対応策、特にメルケル首相が主導したドイツの対応と比べてみると、わが政府の混迷ぶりは際立っていたと言わざるを得ない。横浜港に接岸したクルーズ船での集団感染から「アベノマスク」の配布に至るちぐはぐな対応は国民の中にも政府不信を広げることになり、安倍首相の数々のスキャンダルと相まってついに首相の退陣につながった。野党をはじめ、政府批判の勢力が果たせなかった政権の交代をコロナがなし遂げたということになる。

一連の事態の中で、マスコミの役割の重要性が改めて認識された。政府の発表をそのまま代弁するような報道姿勢では、危機的な状況には対応できない。政府の行動を監視し、一般市民の声を代弁して政府に対する適切な批判を加えることこそ新聞・テレビの任務であることに市民は改めて気付かされることになった。

また、政府の混迷ぶりと対照的に、自治体の存在感が増したというのも1つの特徴であった。感染の状況と対応策は地域によって異なり、全国一律の施策では事態に的確に対処することができない。基礎自治体である市町村と、それらを広域で束ねる都道

府県の役割分担はどうあるべきか、上の指示を待つのではなく、地域がそれぞれの状況に応じた判断をすることが求められた。テレビ出演の増えた知事や市長の品定めが出来たし、町の広報や窓口の対応などによって自治体の能力や首長の真価が明らかになりつつある。コロナは「わが町」の行政の質を露わにし、結果的に市民の自治意識の高まりに何ほどか貢献したと言えるかもしれない。

それにしても、日本は欧米のように法律で強制しなくても、外出「自粛」が徹底したのは見事というべきだろう。「お上の指示には従う」という伝統的従順さとともに、従わない人々に対する監視の目が張りめぐらされて行く感じがあった。道行く人のマスクの上から覗いている厳しいまなざし—これこそが「世間の目」であると思われ知らされた。世間の目を無視してマスクなしで歩くには大変な蛮勇を必要とする。現在では街でも建物の中でも、駅や交通機関の中でもマスクをしていない人はまずいない。手洗いもソーシャルディスタンスも徹底している。こうした同調性の高さは日本社会の体質を如実に表している。第2次大戦後75年を経過しても、国民性は簡単に変わるものではないことをコロナが証明してくれた。

第1次、第2次の感染者数の拡大があっても、重症者や死亡者は欧米に比べて少なく推移している。最初はそもそも検査数が少なかったという面もあるが、その後も爆発的感染が抑えられているのは、もともと清潔好きな国民性があり、手洗い、うがい、マスクがコロナ以前から日常的に行われてきたこと、他者との身体接触に対して欧米に比べて淡泊であることも一因だろう。日本の伝統的宗教である神道は「払いたまえ清めたまえ」という神主の祈りに象徴されるように、穢れ（汚れ）を忌み嫌う「清潔教」なのである。こうした民俗が大きな役割を果たしていることも無視できない。

## 3) 観光とレジャーの問い直し

コロナ禍がもたらしたもっともドラスティックな変化は「観光」に現れた。日本経済において観光レジャーの持つ巨大な位置に気付かされることになったのである。コロナ禍による外国人観光客の激減はインバウンド（入込観光客）による稼ぎの大きさと

重要性を浮かび上がらせた。

国際観光においてアウトバウンド（日本人が外国に観光に行く）は経済的には、外国に行ってその国の財とサービスを購入するので「輸入」である。対してインバウンドは日本国内の財とサービスを外国人に売る「輸出」である。食糧の6割（カロリーベース）を輸入に頼っているわが国は輸出なくしては経済が成り立たない。かつての家電製品や今日の自動車のような輸出の花形に代わるものはインバウンドという輸出である。中国から1000万人、韓国600万人、台湾500万人の訪日外客（2019年）がこの列島にもたらしてくれた富が、あっという間に消滅するという事態がコロナ禍の下で起こったのである。来日客を運んでいた航空会社、鉄道、バス、レンタカー、宿泊や食事や土産物を提供していたホテル、旅館、デパートや小売店から飲食店に至るまで、日本の観光業は壊滅的な打撃を受け、倒産する企業が相次いでいる。

日本を代表する老舗旅館が次々と経営危機に陥るという事態も報道されている。これらの日本の文化資産も実のところ外客に支えられていたことを思い知らされることになった。どうすれば日本的な観光資源を支えられるかという取り組みも始まり、宿泊券の事前販売などの試みが生まれた。秋口から始まったGoToキャンペーンもそうした試みだが、コロナが終息しない中でどこまで続けられるかが問われている。

観光から日常生活圏でのレジャーに目を移してみよう。レジャーランドはもとより、野球やサッカーなどのスポーツ施設、動物園や水族館、博物館や美術館、さらには劇場、音楽ホール、映画館、ライブハウス等々の文化施設、カフェやバーや居酒屋まで、すべてが規制と自粛の対象になった。人々が集まる3密（密接・密着・密集）の空間は感染拡大の温床として営業の休止を迫られたのである。およそ人間の楽しみは「3密」の中にある。3密のもとでこそ人と人との交流は盛り上がり、楽しい遊び体験を味わえる。3密を失うことがいかに味気ないものであるかを誰もが痛感することになった。いまや3密レジャーから脱した拡散型レクリエーションを生み出すことが求められる時代がやってきた。

レジャー空間は、ただの気晴らしを提供している

だけではない。パチンコ店が閉鎖されて行き場を失った高齢者が心の平衡を失うという事態も報告されている。世にはパチンコでストレスを発散し、生きる望みをパチンコにかけざるを得ない人が数多存在する。コロナはパチンコ店のレゾンデートル（存在価値）を明らかにしてくれたのである。

#### 4) コロナと経済問題

コロナ禍はリーマンショックどころでない日本経済への大打撃をもたらしつつある。長く続けられたアベノミクスも破綻を免れないだろう。世界経済も長期にわたって停滞することが予想される。もちろん政府も全く無策ではなく、ヨーロッパ諸国に比べておよそ迅速とは言い難かったが中小企業への助成や家計への1人10万円補助が行われて一定の効果があった。未曾有の危機に臨んで政府は巨額の財政出動をせざるを得なくなったわけだが、このことは新自由主義的な緊縮—自由放任型政策の見直しと福祉社会政策の重要性を再認識させつつある。全国民に一定の収入を保障するベーシックインカムやMMTへの道も現実味を帯びてきた。コロナ後のマクロな経済政策についてこれから様々な論議が巻き起こることだろう。

経済活動が縮小する分野がある一方、コロナ禍が新たな需要を生み出し、生産活動が活性化する側面も見出される。以下のような「コロナ特需」が大きな話題となった。

① マスクと消毒薬、医療機器…「アベノマスク」はとんだお笑い草だったが、普段は十分足りているように見える医療品があっという間に消えてなくなるのを目の当たりにした。実はマスクの8割が中国からの輸入だったという。嫌韓嫌中などと言って中国や韓国への反感を煽る論調が一部にあるが、感染対策に欠かせないマスクの大半を中国に依存していたのではあまり大きなことは言えない。

② ネットワーク用品…突如、在宅勤務が急増し、ノートパソコン、パソコンに装着するカメラ&マイクなどの需要が急増し、たちまち在庫が空になった。これらの製品の多くが部品を中国に依存していて増産ができないという事情も明らかになった。

③ 「おうち」特需…「おうち」で時間を楽しむために必要な装置として「楽器」に人気が集まっている

という。インテリアや装飾品、花なども従来の需要を大きく超える事態となっている（「おうち余暇」については次章で考察する）。

こうした事態の中で新しい財やサービスが作り出され、コロナ後の生活産業に大きな変化がもたらされることが予想される。

## 5) コロナと教育問題

春には全ての学校が突然の休校に追い込まれ、小学生から大学生まで、学習補償をどう進めるかが深刻な課題になっている。オンライン授業をはじめ、学校外学習の見直しが進む中で、学校そのものの問い直しも問題意識に上がって来た。

その1つは、学校に集まって行う一斉授業ばかりが学習形態ではないという認識が生まれたことである。小中学生は課題をもらって家庭での自学自習を行うことになったが、そこには学校授業の埋め合わせ以上の意味があるのではないか。教師が一方的に押し付ける学習ではない、自分から自発的に取り組み、何かを発見する学習の方が身に付くのではないか、そんな見方も出てきている。

改めて読書の価値が再発見されていることも重要である。本を読むことは簡便にして有益かつ深遠な営みであり、そのすべてをスマホとタブレットに置き換えることはできない。本1冊あれば、他に何の道具もいらず、いつでもどこでも行うことのできる読書は、子どもから成人まで、知的活動の原点と言える。コロナ禍のもと書店を訪れる人が増え、出版業も「コロナ特需」の恩恵を受けているのは喜ばしいことである。この風潮が「活字離れ」に歯止めをかけ、出版文化の衰退を押しとどめることが望まれる。

小中学校においては、コロナ禍を端緒として、学校と地域との関係をより重視せざるを得なくなるだろう。家庭と近隣の地域社会の教育力を高めることが学校を改善することにつながるからである。文科省が打ち出している「コミュニティ・スクール」— 地域社会が学校経営に参画するという構想 — が現実味を増すことが期待される。

大学教育はコロナの下で激変した。ほとんどの大学において前期の授業はオンライン方式で行わざるを得なくなった。いずれの大学も情報環境の改善を求められ、教員は授業をオンラインに適合させるた

めに、映像資料の作成や学生とのやり取りに忙殺されている。大教室での一方的な講義よりも、双方向のオンライン学習の方が学習効果が上がるという報告もなされている。その反面、ゼミナールのような少人数の、人間的なふれあいのある教育の場を失って、何のための大学かという疑問の声も高くなっている。コロナを経た後、大学が元の木阿弥に戻るといことはもはやあり得ない。インターネットの活用とともに人間的コミュニケーションも追求できる新たな大学の在り方が求められている。

## 6) コロナ禍と環境問題

世界的なコロナ禍をもたらした背景には、地球規模で広がる環境破壊がある。グローバル資本による原生林の大規模伐採が、森の奥で野生動物とともに静かに暮らしていた未知のウィルスを人間世界に引き出し、拡散させた。ウィルスの蔓延は自然からの警鐘に他ならない。

地球上のあらゆる生き物は細菌から動植物、人間に至るまでみな緊密に繋がっている。われわれの生命は植物が作り出す炭水化物その他の栄養分と、それを食べて棲息する動物たちのもたらす脂肪やタンパク質を取り込んで維持されている。人間の生もこの壮大な命の連鎖の中にあり、それから逃れることはできない。動植物とともに生きる自然こそは我々の生命の土台である。

しかし、近代以降、特にこの半世紀、人間が自然に対して加えてきた破壊行為は凄まじいの一語に尽きる。化石燃料を燃やすことによるCO<sub>2</sub>の増加は気温の上昇をもたらし、温暖化によって気候は荒々しさを増している。生活廃棄物による海洋汚染はとどまるところを知らない。コロナ禍はそれら人間の行為へのリアクションと考えねばならない。

ウィルスは人類が定住を始めたころから、人間社会の宿痾として人に取り付いてきた。天然痘をはじめ、ペストやコレラに代表されるさまざまな感染症は、常に人類とともにあり、人間の歴史を作る重要な素因の1つであった。ウィルスを撲滅することはできない。ウィルスとの穏やかな共生こそが唯一の道である。それには人間の社会の在り方、現代の大量生産—大量消費のあり方そのものを見直すしかない。

日本の国土はおよそ67%が森林である。その比率

は森の国フィンランドに次いで高い。都市化が進んだといっても日本列島の緑はまだ十分にある。特に都市周辺に残された自然地、人間と自然がともに創り上げてきた「里山」の存在価値は計り知れないほど大きい。大規模開発を見直し、緑豊かな国土の保全が急務である。

## 2. コロナ禍と「おうち余暇」の発見

前章で見たように新コロナウィルスの蔓延は私たちの暮らしのあらゆる面に甚大な影響を与えている。特に人々の行動が制約され、家庭での勤務が求められたことで、勤労者の労働と余暇の在り方が大きく見直されることになった。長時間労働が常態化している日本の勤労者にとって、勤労は職場、家庭は単なる休息の場、余暇と言えるものは職場と家庭の間にある第3の空間—盛り場やクラブで消費されるものだった。週末の余暇となると家族にせがまれて、都心へ買い物に行ったりレジャー施設を訪れたりするという「お出かけ」型の余暇になるのが当たり前だった。コロナ禍がやってきて、仕事が家庭で行われるようになると、仕事の後の余暇も、仕事の間の余暇も、家族と過ごす余暇もすべて家庭が舞台とならざるを得ない。これまでの日本人の余暇の場として重要な位置になかった家庭という場を余暇空間として見直す必要が出てきたのである。すなわち「コロナの休日」が与えてくれた「おうち余暇」の発見である。

### 1) 否定されたものと肯定されたもの

コロナ禍によって否定されたのは3密（密閉、密集、密着）と移動である。人が集まることが危険視され、生活の場を離れて出歩くことの自粛が求められた。それによって、われわれの余暇（レジャー）の中心にあったのがまさしく3密と移動であることを思い知らされた。映画、演劇、音楽、寄席からライブハウス、カフェ、バー、居酒屋…1つとして3密でないものはないし、ディズニーランドも動物園も水族館も、温泉観光も名所旧跡めぐりも移動を伴わずには実現できない。

その代わりに推奨されたのは疎開（バラバラになること）と自閉（閉じこもり）である。なるべく人と会わないこと、やむを得ず外出するときはマスク

で防御、知り合いに会ってもよそよそしく、そっぽを向いて言葉少なに語り、握手もせず、まかり間違ってもハグなどしないことが新たなマナーとなった。この事態は否応なく「引きこもり」の再認識をもたらすことになる。不登校の子どもたちや自室から出ようとしない若者たちの生活スタイルは、これまでは正常でないもの、矯正されるべきものとして否定的に扱われてきたが、コロナ禍は、引きこもり・閉じこもりの価値を見直させてくれ、不登校の子どもたちのストレスを一気に軽減してくれた。

### 2) 家庭と近隣の発見

コロナ禍によって大多数の人は家庭への引きこもり・閉じこもりを余儀なくされた。家庭もまた3密空間に他ならないので、家族の健康維持は最優先の課題となった。もし感染すれば病院に隔離され、重症化しても見舞いもならず、死の床にあっても看取りはおろか葬式もできないという深刻悲惨な事態が待っている（この問題は医療と福祉の根本的な問い直しを迫るもので、第3章で改めて考察する）。

家族が健康でさえあれば、「おうち」の諸条件を生かして、さまざまな生活の楽しみを追求することができる。何らかの「楽しみ」を見出し、作り出すことが出来なければ、家庭生活は味気ないものとならざるを得ない。以下のような多種多様な楽しむ工夫が現れ、テレビやスマホで紹介された。

- ・家事を楽しむ：(特別な)料理、パンを焼く、掃除、片付け、手芸、マスクづくりなど。  
多くの男性はこの方面で新鮮な体験を味わえた。
- ・家庭内ゲーム・レクリエーション：トランプ、花札、かるた、囲碁将棋、麻雀などの伝統的なものから、テレビゲーム、ボードゲーム、さらには、お家でキャンプ、お家で遊園地、回転寿司（ルールおもちや利用）などのアイデアが出てきた。
- ・おうちで鑑賞：映画や音楽鑑賞、パソコンを活用した美術館巡りなど。ドラマの制作が中断されたテレビ局は、様々なコンテンツを流したし、閉鎖された劇場や音楽ホール、美術館等でもオンライン発信を行った。
- ・ペットと遊ぶ：犬や猫は人間関係の緩衝役として普段にもまして重要な役割を果たした。我が家のペットを紹介する映像がネットにあふれた。

- ・「庭」とレクリエーション・スペース：庭があってこそ「家庭」である。園芸、運動スペース、子どもの遊び空間として庭が重要な場所であることが確認された。物置や作業場があれば余暇活動の場として活用できるということも再認識された。(アメリカの家庭には半地下の工作室や運動スペースを持つものが多い)。
- ・散歩と公園：散歩は生理的・精神的な健康維持に欠かせない行動である。散歩の同伴者がいればコミュニケーションの場ともなる。歩いて行かれる1~2キロ圏内に適当な散歩コースや公園があることが重要な意味を持つ。いつもはあまり人のいない近隣公園がコロナ禍のもとで多くの来場者を集めていた。
- ・セカンドハウスの効用：近隣にもう一つの居場所があると生活の変化と充実感が格段に増す。遠隔地であって簡単に行けない別荘ではなく、町はずれに立地するドイツのクラインガルテン(ログハウス付きの小農園)、ロシアのダーチャ(週末を過ごす菜園付き小住宅)のような場所の存在価値が認識された。日本でもこうした施設への志向が増すであろう。

### 3) 晴耕雨読 — 精神世界への希求

晴れば庭仕事、雨が降れば家に引きこもって読書 — コロナ禍のもと、悠々自適の閑居の暮らしを余儀なくされた高齢者は数多い。多忙な壮年世代の人たちも突然降って湧いたような「コロナの休日」のもとで、オンライン仕事の合間に本を手にした人も少なくなかっただろう。移動性(モビリティ)の低下は、内面性や精神性への志向を生み出す。瞑想(メディテーション)や座禅は座り込んでじっと動かないことが前提になる。レジャーと言えど動き回ることが当然のように思われてきたが「究極の余暇は瞑想である」と喝破したカトリック哲学者の言葉が思い出された。(ヨゼフ・ピーパー『余暇と祝祭』)。コロナがくれたせっかくの自由時間に自らの精神世界に分け入ってみるのも「おうち余暇」の魅力的なメニューの1つである。

- ・読書と文学の復権：コロナ禍のもと久しぶりに本を読んだという人は少なくない。学校が休みの子どもたちもゲームもしたが本も読むように

なった。文学の面白さを改めて味わった人も多いだろう。文学の強みはどこにも動かずに時空を超えることができるところにある。感染症に襲われる北アフリカの町を舞台にしたカミュの名作『ペスト』に改めて注目が集まり、100万部を売り上げて話題を集めた。コロナをテーマにした新作もいち早く登場し、文芸誌が特集を組んでいる(『新潮』6月号特集「コロナ禍の時代の表現」)。

- ・公共図書館の価値：公共図書館は読書のインフラとして欠かせない存在である。しかし、コロナ禍を理由に多くの公共図書館が休館になった。ネットで蔵書を検索して本を予約し、受け取りに行けばいいというシステムはどの図書館でも取り入れているが、多くの図書館がそれさえも休止した(ネット予約ができない人がいるので不公平になるという理由)。これは明らかに行きすぎであったと思う。地域の図書館の中には電話予約を受けて配送サービスを行ったところもある。今後はこうした対応が求められる。

### 4) 音楽とアートの価値

楽器を演奏したり、絵を描いたり、ものづくりに励んだりするアートの世界も「おうち余暇」にふさわしい。音楽やアートが求める「美の世界」こそは余暇の究極の同伴者である。これを行うには楽器を弾く、デッサンをして絵の具を塗る、素材を変形させて形を作るなどの「余暇能力」が必要であり、また、楽器やキャンバスや工作道具などの「余暇装置」が手元になければできない。ここでは過去に行われた余暇投資の蓄積がものを言ってくる。

- ・おうち特需としての楽器：コロナ禍のもとで売れた商品もある。マスクや消毒薬などは当然だが、思いがけないものの需要が高まり「コロナ特需」が生まれた。「楽器」もその一つである。家で過ごす時間の一部を使って、かつては夢中になりしばらくやっていない楽器演奏を思い出した人々がいるのである。この際、新しい楽器を購入しようという需要もあり、ウクレレやギターがよく売れたという。音量を制御できる電子楽器を手に入れたいという要望も増えた。(電子ドラムというのもあって、物理的には小さな音しか出ないが電子的には凄まじい音をヘッドフォンで聴くことができる)。

マンションなどの集合住宅には、ピアノを弾くために「防音室」造ったところを見かける。近隣の住民からの騒音についての苦情を避けるための措置だが、こうした設備があれば、おうち演奏のためには打ってつけであろう。

- ・ブリコラージュの追求：ブリコラージュとは「ありあわせの道具と材料とを用いて何かを作ること」（広辞苑）である。日曜大工のようなイメージだが、始めから計画され、手順や方法が明確な「仕事」ではなく、作りながら自由に改変して始めの目論見とは違ったものになったりする気ままな手作りである。コロナ禍のもとで多種多様に作られた手作りマスクなどもこれに入るだろう。何かを作ることは人間の本能と言ってもよく、一人で夢中になって何時間でも集中して過ごせるし、満足感も大きい。

## 5) リモート余暇の開発

自宅勤務を余儀なくされた勤労者は、オンラインを活用して会議を開いたり交渉を行ったりして、これまでになかった仕事のスタイルを創り上げつつある。リモート（遠隔）仕事があればリモート余暇もあってよい道理である。Zoom などによるオンライン会議の普及とともにオンライン・レジャーも広がってきた。

- ・オンライン飲み：オンラインで話をしながら、それぞれが好きな酒を飲み合う。お互いに素顔を見つめ合いながらできるところがミソであり、思いのほか盛り上がる。取り留めもない話が弾み、リアルな飲み会以上に酔いが回るという話もある。
- ・オンライン・トレーニング：画像を観ながら体操をしたり、筋肉トレーニングやヨガを行う。双方向なので講師からアドバイスをもらうこともできる。疲れたら気軽にリタイアできるところが利点か。
- ・オンライン句会：俳句をひねっておいて、オンラインで句会を開いて互いに紹介し合って感想を述べる。幹事役があらかじめ句を集めておいて、作者を伏せて披露し、各人が点数を入れて秀句を選ぶのも面白い。連句と言って何人かのメンバーが集まり、一句を分けて前段（575）と後段（77）とを付け合っていく方式があるが、連句にはオンラ

イン方式が向いている。

- ・語学練習：双方向のやり取りができることを活用して、画面を通して1対1で向い合った指導者と生徒が会話の練習を行う。現実の対話よりもやりやすいという感想もある。楽器の演奏や茶道、華道にも使えるかもしれない。
- ・学びの余暇としての通信教育：リモート学習は2020年の大学では一気に普及した。学生にとって学びやすい手法もいろいろ開発されている。これを社会人の通信教育にも応用すると効果的であろう。テキストを読み、レポートを書くだけの通信教育が、教師との対話の機会を設けることで一層深い学びを得ることができよう。

## 6) 人と人の絆を保つ「想像力」

コロナ禍は人々を分断し、人がそれぞれバラバラに生きる社会が生まれようとしている。仕事においても余暇においても、他者との直接的なコミュニケーションを要しない疎開・自閉型のプログラムが考案され、普及が図られている。これから先、人々は互いに疎外され、孤立し合ったまま生きて行かなくてはならないだろうか。人間同士の親密さや社会の連帯や団結はポストコロナの時代にどこまで回復されるのだろうか。

ここで重要なことはコロナがもたらした分断は、感染症を避けるための身体的、生理的な分断であって、決して社会的存在としての人間の社会性そのものを解体するものではないということである。国境は閉鎖され、モノの行き来さえ滞る状況の中でも、世界の人々はネットを通じて情報交換を行い、互いの置かれた状況に思いを寄せ、さまざまな方法で援助を取り交わそうとしている。マスクの不足が知れ渡ると手づくりのマスクを作って国境を越えて送り合う動きも活発になった。分断されていても連帯し合うことは決して不可能ではない。

連帯とは手と手をつなぐことではなく、心と心をつなぎ合うことである。連帯の根源にあるのは「想像力」である。アフリカの飢えた子どもたちや中南米の疲れた母親やヨーロッパの死にかけた高齢者の状況をわが身の中にありありと思い描くことのできる想像力こそが連帯を生み出す原動力である。それを土台にして、地球に生きるすべての人間、獣、鳥、



魚に至る動物たち、昆虫たち、さらには植物から細菌、ウィルスに及ぶすべての生命が互いに繋がりが合っているという事実を理解し、生命体の連鎖としての地球世界を実感できることが望まれる。こうした想像力と感性を持つことが人と人の連帯を生み出すための欠かせない条件である。

コロナ禍は一見、人間社会の分断を促進するかにみえるが、これを未来志向で捉え直してみれば、世界のすべての人間同士が国境を超えて新たな絆を結び直す、またとない機会を与えてくれるとも言えることができる。人々を分断しているのは、実はコロナではなくて、利潤だけしか念頭にない強欲資本主義であり、狭く凝り固まった民族主義や国家主義であり、偏狭で排他的な宗教（それは決して宗教本来の姿ではない）である。私たちは今一度、私と家族と近隣の「おうち」余暇のエネルギーを汲み出して、人間の持つ豊か度でかつ尽きることのない想像力を最大限に発揮させ、国を越える世界市民の新たなきづなを生み出さなくてはならない。

### 3. コロナ禍が福祉に突きつけるもの

コロナ禍は日常生活の背後に潜在していて通常はよく見えなかったさまざまなことがらに気付かせてくれた。多くの人々が漠然と感じていたことを明確にし、何が真の問題であるかを明らかにもしてくれた。その中には、人々が何を幸せと感じるか、また、どうやってその幸せを維持し、発展させるかという問いも含まれる。この章では、人間の幸福＝福祉を支える仕組みである「社会福祉」の課題に注目し、コロナが露わにしたもの、日本の社会福祉が抱える隠れた（そして明らかになった）問題点を点検してみよう。

#### 1) コロナが露わにした「福祉文化」の現実

コロナ禍のもとで第一番に浮かび上がって来たのは、この国の至るところに蔓延していた多種多様な「差別」の態様である。それはまず「働くこと」の中にある理不尽な差別を浮かび上がらせた。経済活動が一気に低下し、仕事なくなったことのしわ寄せはもっぱら非正規雇用者に押し付けられた。アベノミクスの金融緩和策で、实体经济は劣化しても株価だけは高値を維持し、大企業は利潤を上げて巨額な

内部留保を貯め込んでいることのカラクリは、何よりも正規雇用者の賃金は上げずに非正規雇用者を増やし続けて人件費の節約を図ったからである。コロナ不況のもと真っ先に解雇された非正規雇用者の多くは生活の基盤を失い、路上生活に陥る人さえ後を絶たない。雇用の中にある厳然たる差別があることが白日の下に晒された。

外国人労働者の場合も深刻である。この国にはすでに200万人を超える外国人がさまざまな分野で働いて日本の産業を支えているのだが、「移民」をほとんど認めないこの国の外国人管理政策のもと、多くの外国人が法律の保護もなく、そのため十分な報酬も福祉サービスも受けられず過酷な労働に従事させられている（技能実習生という欺瞞的制度の存在も問題だ。研修の名のもとに低賃金で自由のない労働が強いられている）。コロナ禍はこれらの人々を直撃した。一方的に解雇され、国境が閉ざされて帰国もかなわず、文字どおり路頭に迷っている多くの外国人がいる。

また、障がいのある人たち、乏しい年金で暮らしている高齢者、家庭内暴力にさらされている母親と子ども、それらの弱い立場の人たちほどコロナ不況の影響は深刻になる。こうした場合のセイフティネットである生活保護費も、支給の条件を厳しくして抑制策が取られている。政府は緊急の給付金10万円を配ったが、収入の道を阻まれ、蓄えも乏しい人々がそれでどれほど持ちこたえられるだろうか。その上、地域社会の中に「生活困窮者は地域の邪魔者」という感覚が広がっているようにも見られる。こうした排除の姿勢はひとたびコロナに感染した時に露骨に現れる。誰もがマスクを手放さない現状の背後には「もし感染してそのことを知られたら地域に住めなくなる」という恐れが潜在していないとは言いきれない。こうした差別意識や排除の論理の存在をコロナ禍はあからさまにしてくれたと言えるだろう。

とは言え、それと同時に人々の相互扶助への覚醒が生まれていることを指摘しておくことも必要だろう。コロナによって分断されるからこそ結びあい、助け合わなくてはならないという意識も盛り上がりを見せている。アベノマスクが届くよりもはるかに素早く、マスクの手づくりの工夫がネットで紹介さ

れ、大量にストックを持つ人からの抛出も行われた。友人知人に手づくりマスクを贈り合うという新たな福祉文化も誕生している。外国に知己のいる人から励ましのメールが来たり、海を越えてマスクや医療品が送られてくる（またこちらからも送っている）ような市民レベルの助け合いが着実に広がっている。世界市民として国を超えて相互扶助を積み上げていくことが世界の福祉文化を向上させる力となる。

## 2) 医療・福祉現場の「ゆとり」不足

コロナの拡大が医療現場に大きな負担をもたらしたことは言うまでもない。医師も看護師も自ら感染する危険を冒して不眠不休の検査と治療に追われ、老人ホームの介護士は逃げ場のない3密の環境の中で高齢者を支え続けている。とは言え、このことによって日本の医療の脆弱さが露わになり、民間主導の福祉サービスの危うさが浮き彫りになったことも確かである。

まず、日本の医療の「ゆとり」のない実態が見えてきた。病院もベッドも医療従事者も医療器具も平時の需要を超えた余裕のある配置ではないことが明らかになった。感染者が欧米並みにもっと急激に増えれば医療崩壊は必至という状況だった。病院に常日頃から空きベッドがあるのは、こうした緊急時の備えであるはずだが、経営効率が最優先でベッドの稼働率ばかりがチェックの対象という現在の病院経営では、人員も装備もぎりぎりで行っていかなくなる。公共サービスを削減し、何によらず民営化を金科玉条のように推進し、「金儲け」が全てという発想では大きな危機に対応できないことはだれが考えてもわかる。

高齢者のデイサービスや老人ホームにおいてもコロナ危機は深刻である。さほど大きくもない施設に多くの高齢者を抱え込み、3密にせざるを得ない状況における介護事業は、介護に携わる専門職の「命を懸けた」仕事によってかろうじて支えられている。介護現場では、物理的な条件ばかりでなく職員の劣悪な待遇が大きな問題になった。民間に委ねられた有料老人ホームの中には、空間的なゆとりが乏しいばかりでなく職員の数も不足しているところが少なくない。肉体的にも精神的にも厳しい仕事であ

りながら、福祉関係の賃金水準は一般に比べてかなり低い。これは福祉を「商売」にしたことの帰結である。介護系の養成学校を卒業した若い人たちが介護現場への就職を望まないのも宜なるかなと言わざるを得ない。介護職の待遇改善は急務と言えよう。そのためには福祉事業への公的支援を大幅に拡大しなければならない。

保育事業においてもコロナは大きな問題を突きつけた。コロナ禍に対応して多くの保育園が閉鎖されたり、保護者に登園自粛を要請したりしたが、それを受け入れられる家庭ばかりではない。母子家庭で母親が働きに出なければ日々の暮らしが立ち行かない家庭では、子どもを受け入れてくれる場所を確保することは文字どおり死活問題である。

コロナが医療と福祉に、それだけでなく人間の生と死に対して突き付けてきた最も重い問いがある。家族の一人でも感染したら、その人は隔離され、重症化すれば誰にも看取られず死なねばならず、葬儀さえも行えないという事態が出現した。病院に入った後は遺骨になってそのまま墓地へ直行ということになる。まことに衝撃的であるといしか言いようがない。死にゆく人々を支え、最期を安心して迎えてもらい、その人に関わった多くの人々が一人の死を共に見送るといふ死に方の手順と儀式は、あらゆる国々の福祉文化の最重要な営みである。人間の歴史とともに古いこの文化がもろくも破壊されようとしている。これにいったいどう対処すればいいのか。

## 3) 福祉サービスの発想転換

コロナは日本の福祉の特質をさまざまな面から露わにした。その特徴を要約すれば、福祉サービスの主流が相変わらず施設収容型であり、与える福祉であり、集団主義的な運営が主流だという3点にまとめられよう。コロナ禍はこの日本の特質が感染症に対してきわめてぜい弱だという事実を改めて認識させてくれた。その典型をクラスター（集団）感染に見ることができる。クラスターの発生はカラオケやライブハウスや居酒屋などレジャー・飲食施設と並んで、病院や介護施設でも広く見られた。病院はもちろん、介護施設でも訪問者の手指の消毒やうがい等は以前から行っているが、それでもコロナウィルスの侵入を防ぎきることは難しいようである。

感染を避けるための対処法はこれからもさまざまに開発されていくだろうが、問題の根っこにはもっと大きな問題がある。それは日本の高齢者福祉サービスは圧倒的に施設収容型福祉に偏っているという事実である。豪華な有料老人ホームから特養まで選択肢は豊富にあるように見えて、施設収容型である点は変わらない。コロナ禍を契機にその見直しが求められている。

多くの高齢者をひとまとめにして介護を行えば効率がよく、多様な資源を有効に使って比較的安価に（もっとも豪華サービスを売りにする高額なホームも数多あって人気を博してもいるが）介護サービスを提供できるかもしれない。しかし、そのみが唯一の方法ではない。利用者を1か所に集めるのではなく、福祉サービスの提供者が利用者の生活拠点へ出かけて行ってケアを行う訪問介護・訪問看護・訪問リハビリという方式もある。こちらの方が利用者の個別のニーズによく対応できるし、集団の圧力が存在せず、コロナでいえば3密の危険は少ない。施設収容ばかりでなく、このような「出前型」の福祉サービスがもっと拡大されていいはずである。こうした地域密着型の福祉サービスは、住まいの周辺における地域の「福祉力」を高めるという課題への取組みを促すことにもなるだろう。

施設型の福祉の場合、集団生活の潤滑油として、どのデイサービスでも老人ホームでも行われている定番のプログラムに「レクリエーション」活動がある。これについても大きな偏りがあることが指摘できる。現在「レクリエーション」と言えば集会型・身体型かつ指導者中心型の「みんなで楽しく」が主流である。一室に高齢者を集め、指導者が前に出て来て一斉に体操をしたりゲームをしたり歌を歌ったりする。一人一人の高齢者の志向や好みはほとんど考慮の外である。むしろ、そうした集団レクリエーションにも交流やコミュニケーションを高める効用はあるだろう。しかし、それだけでなく、一人一人の遊び・趣味を支援する個別型プログラムが重視されるべきだろう。3密が避けられ、個室に閉じこもる時間が増える状況の中では、「みんなで楽しく」ではなく、個々人「みんなが楽しく」なることが目指されなくてはならない。

レクリエーションの充実のためには、プログラム

開発ばかりでなく、レクリエーション環境を整備することが欠かせない。ゆったりとした空間や本やアートや音楽に触れることのできる場所や装置、生活の場に自然を呼び込む造園活動にも力を入れる必要がある。コロナは福祉レクリエーションの発想転換を迫っているということもできるだろう。

#### 4) 働き方改革への道…勤労者福祉

福祉の課題は子どもや高齢者だけのものではない。働く人たちの福祉＝勤労者福祉を忘れることはできない。コロナ禍が有無を言わず与えてくれた「コロナの休日」によって、多くの勤労者が気づいたのは、自分たちが早朝から深夜までいかに長時間働かされてきたかという事実である。会社に出勤しない（できない）日々が続くことによって、この国の長時間労働と貧弱な休日・休暇の実態を否応なく考えさせられた。コロナが落ち着いて毎日出勤する日々が戻って来たとしても、一たびコロナの休日を体験した以上は、毎日残業・休日出勤の働きすぎ日本人がそのまま帰ってくるとは思えない。

千歳一遇のこのチャンスを生かして「通常残業」体質から脱し、週休2日制を徹底し（勤労者数から言えば完全週休2日制の下にある勤労者はいまだに6割に過ぎず、残りは隔週2日休みとか月1回だけの週休2日制）、有給休暇の完全取得（現在の取得率はおおむね5割、完全取得が当然の欧米との格差は大きい）を実現し、さらに欧米並みの4週間から6週間に及ぶ長期休暇（バカンス）を確保することが目標になる。

在宅勤務を余儀なくされたサラリーマンの多くが「テレワークでも結構いける」と感じている。毎日通勤地獄の中を都心のオフィスに通う必要は必ずしも自明ではない。オンライン会議もなかなか面白い。一人一人の顔をしっかりと見つめ合いながら、気持ちを画面に集中して論じ合う体験が職場のマンネリ化した会議に活を入れる可能性もあるだろう。「一緒にいなくても仕事はできる」という確認は、セクハラ、パワハラが蔓延する職場風土を変える契機になるかもしれない。

コロナ禍を体験することで、働き過ぎ日本人からの脱出の道が見えてきた。職場とともに生活の2大拠点である家庭の価値を再確認した勤労者は、家庭

生活充実の基礎資源である余暇＝自由時間の確保に努めることであろう。圧倒的に職場人間に偏っていたこれまでの勤労者は、ポストコロナの明日を目指して、職場人＋家庭人＋地域人のバランスの確立に向かって歩み始めるに違いない。これはコロナ対策における生活的な基盤を強化することにもつながるはずである。

## 5) コロナと福祉政治

コロナ禍を機に世界的に強権支配への傾斜が高まっていることは憂慮すべき事態である。トランプのアメリカ、習近平の中国、プーチンのロシアの3大国がいずれもその傾向を強めてきたが、アメリカはコロナよりも経済的自由を重視するとしたトランプ大統領が、社会の連帯を強調するバイデン候補に接戦の末に敗れて、民主主義への揺り戻しが期待できる状況にはなっている。しかし、3大国ばかりでなく欧米でも国家主義的な傾向の政党が議席を伸ばしているし、アジアや中欧や南アメリカでも独裁的な国家指導者が次々と登場している。日本においてもコロナを好機とみて非常事態法の整備から憲法の人権規定の見直しを画策する動きがあることを警戒しなくてはならない。このことはまた国家と社会福祉の関わりを根底から問い直す課題を提起している。

コロナ禍を巡る社会のさまざまな反応や政府の対応から浮かび上がってくるのは、社会福祉を根底で支えてきた人権思想が揺らぎ始めたのではないかという危惧である。少なくとも論者をはじめ20世紀後半の日本の高度成長期に人となった世代においては、福祉の根本にあるのは、ヨーロッパの市民革命で確立された「すべて人は個人として尊重される権利を持つ」という原則である。この人権思想は日本国憲法の土台となるものであり、個人の尊重と幸福追求の権利（憲法13条）や健康で文化的な生活の保障（同25条）に代表される憲法の規定が社会福祉政策の根本になくなくてはならないと考えてきた。

しかし今日、人権思想とはいささか趣の異なる社会福祉観が政権党を中心に語られるようになってきた。現在の政府が社会福祉を制度化する根底に置こうとしている考え方は「福祉は国家のセキュリティを保つためにある」という思想である。自由競争から落ちこぼれた人々を救済したり、高齢者や障害者

の生活を支えたりすることの意味は、それがなければ大多数のまじめな勤労者が生活に不安を感じ、勤労意欲を失い、社会の安寧と秩序が損なわれるからだというのである。

しかし、ヨーロッパに始まる近代の社会福祉思想の原点は、先に述べたようにルソーの天賦人権論に始まる個人の自由と平等の主張であり、また全ての人の人権を保障し合うための友愛と救済の実践である。コロナ禍は期せずして現在の政権が進めようとしている社会福祉の大転換の構想を露わにしたと言える。社会福祉を国家の安全のための装置に組み替え、福祉サービスを国民のコントロールの手段として使いこなしたいという権力者の意図が見え隠れしている。私たちは改めて個人の権利に立脚する社会福祉の意味を確認し、「国家を守る福祉」という方向転換を根底から批判していかなくてはならない。

コロナのような感染症は、たとえいったん収まったとしても、人間による自然破壊が進む限り、間違いなく再来することだろう。その蔓延に対処するために一定の社会統制が必要な事は否定できない。しかしそれは中央権力からの指令と命令によってしか実行できないものだろうか。地域の連帯を土台に市民の合意に基づく徹底した「自粛」の中で、相互に助け合いながらコロナをやり過ごすことができないはずはない。

コロナ禍は新しい政治思想を招き寄せる。21世紀の世界をリードしてきた新自由主義と「強欲資本主義」の破綻は明らかであろう。それへの対案としてどのような社会と政治のイメージが描けるだろうか。国家に権力を集中させようとする危険な方向とは異なる道がさまざまに模索されていだろう。その一例として、かつてロシアのクロボトキンが『相互扶助論』で主張したような、共同体の復権を基盤とした相互扶助的アナーキズム（反国家主義）の再検討を上げることも出来るだろう。

コロナ禍が提起した今日の社会の諸問題は広くまた深い。それは私たちの社会福祉研究に対しても多角的な再検討を迫っている。社会福祉の現在を、単なる制度論や政策論を超えて文化批判的に掘り下げることが求められているのである。多くの論者とともにこの問題を深掘りして行きたい。

《参考文献》

- ・パオロ・ジョルダノ 飯田亮介訳『コロナ時代の僕ら』早川書房 2020年
- ・アルベール・カミュ『ペスト』新潮文庫
- ・ジャレド・ダイヤモンド 倉骨彰訳『銃・病原菌・鉄』上下 草思社文庫 2012年
- ・石 弘之『感染症の世界史』角川ソフィア文庫 2018年
- ・特集「コロナショック・ドクトリン」『世界』2020年5月号
- ・特集「転換点としてのコロナ危機」『世界』2020年7月号
- ・デイヴィッド・グレーバー 酒井隆歴ほか訳『ブルシット・ジョブ—クソどうでもいい仕事の理論』岩波書店 2020年
- ・ヨゼフ・ピーパー 稲垣良展訳『余暇と祝祭』講談社学術文庫 1988年
- ・クロボトキン 大杉栄訳『相互扶助論』(新装版) 同時代社 2017年

受付日：2020年11月10日

